「ダリア」
1940年、油彩、キャンバス
65・4センチ×53・5センチ
（公益社団法人糖業協会蔵）

林　武（1896～1975年）

第2章「テーブルの上の物語―花の彩り」から。美しい花の絵は、部屋に華やぎや安らぎをもたらすことから、好まれたのは当然のことでした。一般に画家たちも、その需要にこたえるように多く描いています。

糖業協会のコレクションにある「花」をモチーフにした作品をみると、独立美術協会の創立会員たちの作品が多く含まれています。この在野の美術団体は、1930年に里見勝蔵、児島善三郎、林武、高畠達四郎、中山巍、福沢一郎など、14人の気鋭の画家たちによって結成されました。

「昭和」初期の美術界では、闘将といわれるような威勢のいい画家たちの反アカデミズムの団体とみられていました。それだけに、フォービスムを底流とする里見や、独自の造形理論で格闘していた林が、生けられた美しい花をどのように表現したのか、意外な発見があります。

（田中）

〈名画の扉〉

大川美術館企画展「松本竣介《街》と昭和モダン展―糖業協会と大川美術館のコレクションによる」から